「ボランティアスタッフが必要です」

「土壌スクリーニングプロジェクト」が雪で大幅な作業遅れ

ならコープから寄贈されたスクリーニング機。

JA新ふくしまと福島大学、福島県生協連が共同で行なう「土壌スクリーニングプロジェクト」では、土壌の放射性物質による汚染状況を把握し、その実態に沿って必要な対策を実施していくための測定調査（土壌スクリーニング）を2012年9月より行なっています。

このプロジェクトは、ボランティアスタッフの協力が必須であり、これまで、コープネット事業連合、長野県生協連、パルシステム連合会、生協総研、コープしが、ならコープ、大阪いずみ市民生協、コープ共済連、日本生協連がスタッフとして参加してきました。

プロジェクトの調査活動は、月曜日～木曜日の毎日行なわれていますが、降り積もる雪の影響で、今年1月から5週間中断せざるを得ず、再開が2月18日となりました。

このため、プロジェクトの進捗状況は、果樹園44％に対して田んぼは18％しか済んでおらず、計画から大きく遅れています。福島県生協連の平井有太さんは、「果樹園は、栽培をしながらも計測可能ですが、田んぼは作付けされたら、10月の収穫まで作業ができなくなります。そのため、田植えまでに、なんとか急ピッチで作業を進めなければ」と危機感をつのらせます。

事務局では、作業効率を高めるため、ボランティア募集を1日最大4人から6人に増やしたり、参加者全員に義務付けられていた5時間の学習会をリピーターには免除したりするなど、対策を講じ実行する予定です。

果樹園の計測の様子。

※ 支援要請は、8ページ「支援募集情報」参照。

「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に行き、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

気仙沼港にて（13年1月、宮城県）。
※写真と本文は関係ありません。

「募金や行政の助成金がどんどん減ってる。消費税が増税になったら募金はもっと減るから、やりにくくなるね」

岩手県内の仮設住宅への訪問ボランティアを続けているAさんはため息をついた。

ボランティアも、発災直後はNPO団体や個人のボランティアが多数被災地入りし、炊き出しなどに従事したが、発災から3年目を迎える現在はかなり減っている。被災地が忘れられつつある――そんな地元の不安がどんどん現実化していくようだ。

こんな時こそ生協の力に期待したい。地域のコミュニティーが失われても、「生協力」は健在なのだ。それを具体的に伝えるのが編集部の役目であり、私の役目なのだとあらためて思った。

1月20日に亡くなった101歳の詩人・柴田トヨさんは、東日本大震災の際に「被災者の皆様に」と題した詩を寄せていた。「もうすぐ百歳になる私　天国に行く日も　近いでしょう　その時は　日射（ひざ）しとなり　そよ風になって　皆様を応援します」（一部抜粋して掲載）。

支援の方法は、人の数だけある。